

和歌山県南紀方言における終助詞「ヨ」・「ノ」： 命令・依頼との共起

大野 仁美

1. はじめに

本稿は、和歌山県南部で話される方言（以下、南紀方言と呼ぶ）において用いられる終助詞「ヨ」・「ノ」が、命令・依頼とどのように共起するかという観点から分析する。特に、現代日本語の終助詞「ヨ」・「ネ」の用いられ方との相違点に着目して議論をすすめる。

前稿大野 2010 では、南紀方言における文末に用いられる終助詞「ヨ」が、現代日本語の「ヨ」とどのように異なっているかを扱った。まず、南紀方言には、現代日本語の「ヨ」に置き換えられる形式が複数（「ヨ」・「ガイ」・「デ」・「ワ」）存在し、それらがどのように意味的に対立しているかを分析した。その結果、南紀方言の「ヨ」と現代日本語の「ヨ」は、形が同一であり、また一部意味を共有しているため置き換え可能であるように扱われるが、実際はそうではないことを明らかにし、また南紀方言の「ヨ」から見れば現代日本語の「ヨ」は多義／多機能に見えることを示した。

本稿では前稿に続き南紀方言の終助詞「ヨ」と新たに「ノ」をとりあげ、これらの違いを、命令・依頼との共起制限から分析する。

以下、南紀方言の例はそれぞれ「」内に入れ、全体をカタカナで示し、終助詞部分は下線で示す。対訳等として示す現代日本語例は‘ ’内に入れ、終助詞部分のみカタカナで示す¹。

1. 1. 南紀方言における終助詞「ノ」と「ネ」

本稿では、現代日本語の終助詞「ネ」に置き換えられる南紀方言の終助詞の代表的な形式として「ノ」を用いるが、その理由を以下に述べる。

南紀でも終助詞「ネ」²は使用されており、現在においては「ノ」より用いられる頻度が高い。終助詞「ネ」は、テレビ放送などマスメディアを通して日常的に伝えられる、より威信の高い言語変種である大阪や京都といった関西中心地のことばにおいても、また同様に関東中心の変種である現代日本語においても用いられているので、その影響をうけてか、南紀でも現在 50 代ぐらいから下の年齢層（特に女性）は以前から改まった場面では「ネ」を用いる傾向があった。さらに若年層になると、日常会話から「ノ」は消えてしまったかのように感じられる³。なので、南紀方言の形式として「ノ」より「ネ」を用いる方が現在の使用状況と一致していると言える。

それにも関わらず、本稿で、現代日本語の「ネ」に対応する形式の代表と

¹ 本稿でとりあげる方言資料はすべて自身が南紀出身である著者の作例によるものである。

² 現代日本語の終助詞および間投助詞「ネ」に相当する形式として南紀方言には「ナ」・「ニ」・「ネ」・「ノ」が存在する。これらはそれぞれ使用する話者に制限があったり地域的変種であったりするなどの相違が存在するが、その詳細については本稿では扱わない。なおより上の世代（現在 90 代～）においては「ノシ」が用いられていた。

³ 2011 年および 2012 年に著者が東牟婁郡を訪問した際の印象および現地の話者の意見による。「ネ」は、以前から「ノ」に比べてより丁寧で改まった場面において用いられるという傾向があった。たとえば、普段は「ノ」や間投助詞に「ノヨ」・「ネヨ」を用いていても、話し相手が他の地域のことばでしゃべっていたり、会話を録音したりする場合は、「ネ」を用いるという傾向が見られた。「ネ」と「ノ」の違いは、丁寧度にあるのではなく、「ネ」の方がより「標準」に近いと感じられているという点にあると思われる。筆者が 2012 年に東牟婁郡で面接調査および聞き取りをした際に、若年層においては改まった場面ではなく普段の会話においても「方言（この場合は「ノ」、および間投助詞の「ノヨ」・「ネヨ」）をあまり使わなくなって」いる、という意見を複数聞くことができた。今後定量的な調査によって確認が必要である。

して「ノ」を使用するのは、以下の理由による：

- (1) 現代日本語の「ネ」と南紀方言の「ノ」には用いられ方に違いがある(後述)
- (2) 南紀方言で用いられている終助詞「ネ」には、本来の形式である「ノ」で置き換えられるものと、置き換えられないものがある。この、置き換えられない「ネ」は、現代日本語の「ネ」あるいは威信の高い関西方言の「ネ」を用いていると考えられる。

これらの、「ノ」に置き換えられる南紀方言としての「ネ」と、他の変種由来の「ネ」とを区別するために、南紀方言の「ノ」・「ネ」を代表する形式として「ノ」を用いることとし、「ノ」に置き換えられる「ネ」には「ノ」を用いる。

2. 現代日本語の終助詞「ヨ」・「ネ」と命令との共起

従来、終助詞の「ヨ」は命令・依頼と親和性が高いこと、一方「ネ」は依頼には用いられるが命令には用いられないこと(益岡 1991, 滝浦 2008, etc.)・あるいは命令の一部としか共起しないこと(上野 1982)が指摘されてきた。上野(1982)は「～ナサイ」という命令を表す形式には「ネ」が付加可能であることを指摘し、「ネ」が付加することによって命令の意味をやわらげていると分析している。「ネ」が命令と共起するこの例を考慮に入れなければ、「ヨ」・「ネ」それぞれの意味特徴と命令・依頼の意味特徴を直接結びつける分析が可能である。例えば許(2001)は、現代日本語の終助詞「ヨ」・「ネ」が用いられない環境を分析した論考であるが、以下のように命令と依頼の意味分析を行い、それがどのように終助詞の「ヨ」・「ネ」と自然にむすびつのか示している：

命令は、話し手の聞き手に対する一方的言明である

→ 話し手と聞き手の意向の不一致 →ヨ

依頼は、話し手の聞き手に対する一方的言明ではない

→ 話し手と聞き手の意向の一致 →ネ

また、依頼は「ヨ」とも「ネ」とも共起可能だが、どちらを用いるかによって、以下のような意味の違いが観察されるとしている：

依頼+「ネ」=聞き手が自分の依頼に応じてくれると話し手が思っていることを示す

依頼+「ヨ」=聞き手は自分の依頼を聞いてくれなさそうだが、どうしてもしてほしいと話し手が思っていることを示す

滝浦(2008: 136-137)は、命令形および依頼形との共起(制限)から、「ヨ」・「ネ」に対して[話し手]・[聞き手]という意味素性を抽出し両者の対立を体系的に示せるとしている：

- 「ヨ」： (1) 依頼形とも命令形とも共起する。
(2) 依頼形・命令形ともに関わるのは話し手の意志である
→話し手の主体的関与と親和的な性質を持つ ([話し手 +])。
聞き手に関しては何も導かない ([聞き手 -])。
- 「ネ」： (1) 依頼形とは共起するが、命令形とは共起しない。
(2) 依頼形に聞き手の意志は関与するが、命令形にはしない。
→聞き手の主体的関与と親和的な性質を持つ ([聞き手 +])
話し手に関しては何も導かれない ([話し手 -])。

一方、南紀方言では、「ヨ」は依頼とも命令とも共起できる場所は現代日本語の「ヨ」と同様だが、「ノ」はどちらとも共起できない・あるいは依頼との共起に制限がある・頻度が低い。つまり、依頼における「ノ」の用いられ

方が、現代日本語とは異なっている。それはどのように異なっているのか、またその事実はどうに説明されるのか、以下、「ヨ」と「ノ」について、3節では命令との共起を、4節では依頼との共起をそれぞれみて、分析をすすめることとする。

3. 命令との共起

南紀方言の「ヨ」は、現代日本語の「ヨ」と同様に命令と共起する。著者は前稿大野(2010)で、南紀方言における終助詞「ヨ」が文末に置かれた場合、聞き手に対して、伝える情報を受け取るよう強く働きかけるという伝達態度をしめすことを見た。それは、相手が伝えた情報を打ち消して主張したり、相手になにか訴えたりという形で実現する。「ヨ」のこの特徴は、命令と親和性が高い。一方「ノ」は、どのような命令表現とも共起することができない。これは、現代日本語において「～ナサイ」に「ネ」が付加可能であるのと対照的である。

南紀方言の「命令」は以下のような形式によって表される：(1)動詞の活用形(命令形)、(2)動詞連用形に命令を表す終助詞「ナ」が接続、(3)動詞活用語幹にやわらかい命令をあらわす‘-ansi’が付加⁴。

現代日本語「早く行け」

(1)命令形

1. 「ハヨー イケ」‘早く行け’
2. 「ハヨー イケヨ」‘早く行けヨ’
- 3.* 「ハヨー イケノ」

⁴ 命令の終助詞「ヤ」を用いた「イケヤ」も存在するが、「ヨ」・「ネ」とは共起しないため、本稿では省略する。なお、具体例は省略するが、命令と同様、否定命令も「ヨ」とは共起するが「ノ」とは共起しない。

(2) 「連用形+ナ」

4. 「ハヨー イキナ」 ‘早く行きナ’
5. 「ハヨー イキナヨ」 ‘早く行きナヨ’
- 6.* 「ハヨー イキナノ」

(3) 「動詞活用語幹+（j）+ansi」

7. 「ハヨー イカンシ」 ‘早く行きなさい’
8. 「ハヨー イカンシヨ」 ‘早く行きなさいヨ’
- 9.* 「ハヨー イカンシノ」

命令と「ノ」は共起しないので、上野(1982)が分析しているような、「～ナサイ」に「ネ」を付加して得られる相手への配慮の表明からくる命令の柔らかさは、南紀方言の場合「ノ」の付加によって示すことはできない。それは、命令の終助詞「ナ」や、さらに柔らかい命令を示す形式‘-ansi’を用いることによって得られている。

もう一つの手段は、上昇調↑の「ヨ」を用いることである。「ヨ」は上昇↑／下降↓／下降上昇↓↑のいずれかのピッチパタンをとらない、それぞれ、以下のような語用論的意味をうみだす：

- ヨ↑ 問いかけ・軽い促し；やわらかさを付加する
- ヨ↓ 相手の意志に反して言い募るなど強い主張
- ヨ↓↑ 念押し

このうち、「行きなさいネ」に最も近いのは、上昇ピッチの「ヨ」を用いた場合の例8である。

4. 依頼との共起

南紀方言の「ノ」は、依頼との共起が不可、あるいは少なくとも頻度が低いように思われる。しかし、同じ依頼でも「～シトイテ」との共起は適格性

が高くなる：

現代日本語「早く行って」

10. 「ハヨー イッテ」‘早く行って’
11. 「ハヨー イッテヨ」‘早く行ってヨ／ネ’
12. ? 「ハヨー イッテノ」‘早く行ってネ’
13. 「ハヨー イットイテヨ」‘早く行っというてヨ／ネ’
14. 「ハヨー イットイテノ」‘早く行っというてネ’

上記例 11 と例 12 の、現代日本語で形式上最も近い対応例は、ともに「早く行ってネ」である。しかし、逆から見た場合現代日本語の「早く行ってネ」に等価の、あるいはより近い表現は、「ノ」を用いた「ハヨー イッテノ」ではなく、「ヨ」を用いた例 11 で、上昇ピッチを伴った「ハヨー イッテヨ↑」である。

たとえば、ある手料理がおいしかったので、また食べたいとリクエストするのに用いられる「また作ってネ」にあたる表現として南紀方言ではどういえばよいのか考えたとき、まず浮かぶのは「マタ ツクッテヨ↑」であって、「マタ ツクッテノ↑」ではない⁵。かといって、「マタ ツクッテノ↑」が完全に不適格というわけではない。しかし頻度が低いせいか、ではこの文の発話意図はとを考えてみても即座に思い浮かぶようなものではなく、またそれが「マタ ツクッテヨ↑」とどちらがうか考察してみようとしても、明瞭にはちがいが見えてこない。

しかし、同じ依頼でも、「～テオク」をはきんだ「マタ ツクッテイテノ↑」ならば話者が「言いそうな」感じがする。これを手がかりに考えを進めてゆこう。「マタ ツクッテイテノ↑」がひらく会話のやり取りは、聞き手が作ってくれたらそれで完結するような依頼ではない。「今度この料理をつくってお

⁵ 依頼と共に起る「ノ」のピッチパターンは上昇のみで、下降や下降上昇は用いられない。

いてくれたら、それに対して私は〇〇をして、あなたはそれを受けてさらに××をして…」というような、連続するできごと、あるいは交渉ごとをおもわせるようなものなのである。つまり、依頼内容は「料理を作って」であるが、聞き手が話し手の要求をみたくれたら、それに対して話し手は別の何かをして、あるいはそもそも料理を作ること自体が聞き手にも益をもたらして…というような展開を含意する。

ここで留意すべきなのは、「～テオク」が付加されることによってこの「交渉的やり取り」がくっきりした輪郭を持ってみえるようになったのだが、それは「～テオク」から生ずるものではないということである。「～テオク」をはずしてみても、「マタ ツクッテ_ノ↑」にも同様の意味合いが感じられる。一方、「マタ ツクッテ_ヨ↑」にはそのような含意はいっさい感じられない。

では改めて、例 12・例 14 は例 11・例 13 とどのような異なる意味をもつか？ ここでも、例 12 の発話意図はあまり明瞭ではないが、例 14 は、どこかに「早く行って」おくことが依頼者である話し手だけでなく（明示的には表現されていないが）聞き手にも関わりをもつ、あるいは益をもたらすことであることが感じられる。つまり、終助詞「ヨ」が付加されて聞き手に投げかけられる依頼は、その情報を丸ごと受け取って実現することを期待した依頼であるが、「ノ」が付加されている依頼は、その実現が聞き手にも効果をもたらすもので、発話が伝える情報を聞き手が修正したり上書きしたりして展開できるものとして伝えられているのである。

5. 結論と今後の課題

ここまで見てきた命令との共起制限および依頼と共起した際の意味の相違から、南紀方言の終助詞「ヨ」と「ノ」の機能の違いを暫定的に以下のようにまとめておく。

「ヨ」 その発話が伝える情報を修正・上書きせずそのまま受け取るよう働きかける

「ノ」 その発話が伝える情報を修正・上書き可能なものとして受け取るよう働きかける

南紀方言では、命令を意図とする発話は、あくまで話者の命令内容をまるごと聞き手に受け入れさせようとする伝達態度を持つので、「ヨ」とは共起するが、「ノ」とは共起しない。「ノ」をもちいて「やわらげる」こともない。

一方依頼は、依頼内容をまるごと聞き手に受け入れてもらいたい場合と、交渉の余地をもった場合がある。前者の場合、あるいは、聞き手側への影響・効果には触れないで依頼する場合は「ヨ」が用いられる。一方、聞き手が話し手の依頼内容を修正したり、なんらかの影響・効果が聞き手にも及ぶと考えられそれについて含意する場合は、「ノ」が用いられる（頻度は低い）。

この暫定的結論は、現代日本語の「ヨ」と「ネ」についてなされた許(2001)の話者による相手の受け入れ見通しにもとづいた分析結論とは、共通点が見当たらないほどに異なっている。一方、滝浦(2008)において[話し手][聞き手]という2つの素性を立てることによって特定される形で記述された分析に近い⁶が、現代日本語の「ヨ」・「ネ」と南紀方言の「ヨ」・「ノ」は異なる意味を有しているので、それをどのように示すことができるのか考える必要がある。

また、現代日本語の終助詞との相違に関しては、南紀方言の「ヨ」と「ノ」に、現代日本語の「ヨ」+「ネ」の組み合わせにあたる「ヨノ」が存在しない一方で、間投助詞として「ノヨ」が存在することなど解決しなければならない問題も残されている。次稿では肯定文に用いられる「ノ」を中心に取り上げ、現代日本語「ネ」とどのように異なっているか、またその違いを含めてどのような分析の枠組みでとらえるべきなのかを考察したい。また将来的

⁶ ただし滝浦(2008)はこれに終助詞「カ」をふくめた3つの要素からなる体系として素性分析をおこなっている。著者は、南紀方言の終助詞「ヨ」・「ノ」と「カ」は階層(生起するスロット)が異なると考えているので同じ体系に含めて分析対象とすることはしない。

には、先に大野(2011)で提示した間投助詞・間投詞の「ヨ」・「ノ」とも統合する方法で扱いたいと思っている。

謝辞

本研究は、2011年度麗澤大学特別研究助成を受けて行った研究の一部をまとめたものである。本稿では具体例をあげることはしていないが、2012年3月に実施した東牟婁郡での現地調査においてお会いしたたくさんの方々との会話で多くの知見を得ることができ、面接調査で収集させていただいた資料や伺ったご意見を参考にさせていただいた。調査の便宜をはかってくださった八代かおり氏および山本佐代美氏、校舎の利用をご快諾下さった串本古座高校串本校舎教頭永石和先生、現地での調査を励ましてくださった野呂正人教育長および矢倉甚平衛氏に深く感謝申し上げる。

参考文献

- 上野田鶴子 1982 「モダリティ：日本語・英語」『講座日本語学 11 卷：外国語との対象 II 上』：122-141, 明治書院。
- 大野仁美 2010 「南紀方言における終助詞「ヨ」の意味機能分析試論」上野善道監修『日本語研究の 12 章』210-223, 明治書院。
- 大野仁美 2011 「和歌山県南部方言における文末以外で用いられる「ノ」と「ヨ」に関する覚え書き」麗澤大学紀要 92: 223-235.
- 許夏玲 2001 「話し言葉における文末表現と終助詞「ネ」「ヨ」の共起関係——「ネ」「ヨ」が付かない文末表現を中心に——」『言葉と文化』3: 111-126。
- 滝浦真人 2008 『ポライトネス入門』研究社。
- 益岡隆志 1991 『モダリティの文法』くろしお出版。